

異郷
ВТОРАЯ РОДИНА

No.26

April 2008



パールイシエフ・エドワルド氏、第62回、2008年2月2日の報告

На фото: Г-н Эдуард БАРЫШЕВ выступает на 62-м заседании Ассоциации, 2 февраля 2008 г.

目次

《研究会報告》(日本語・ロシア語).....	3
エボフ家と日本(1) — 系譜学的視座から見た日露交渉史(ガルキン・セルゲイ).....	4
ハバロフスクの貿易商の見た東アジア	
— A. ボグダーノフの回想録を中心に(2)(サヴェリエフ・イゴリ).....	7
ハルビンのユダヤ人社会(高尾千津子).....	10
1916年のゲオールギー・ミハイロヴィッチ大公の訪日	
— 「皇室外交」の典型例(パールイシエフ・エドワルド).....	13

亡命ロシア人聖歌者——ポクロフスキーの人と音楽 (松島純子)	16
郡司智麿のアルバムに見る革命下のブラゴベシチェンスク (舟川はるひ)	19
【書評】 外川継男著『サビタの花 ロシア史における私の歩み』を読んで (安井亮平)	24
【書評】 バールィシェフ・エドワルド著『日露同盟の時代 1914～1917年』 ——人の顔をもつ国際関係論 (中村喜和)	25
【露語文献紹介】 А. А. ヒサムジーノフ編 『中国における亡命ロシア人—セレブレンニコフ夫妻の日記に見る』 (松村都)	28
【露語文献紹介】 ペルミの大主教アレクサンドル・トルストピャートフと日本 (清水俊行)	31
《会員の仕事・近況》	34

ВТОРАЯ РОДИНА

Японская Ассоциация

по Изучению Восточной Ветви Русского Зарубежья

№ 26

Апрель 2008 г.

Содержание

Доклады на заседаниях Ассоциации (яп. и рус.)	3
Семья Эповых и Япония (1) – История японо-российских отношений через опыт генеалогического исследования	ГАЛКИН Сергей..... 4
Восточная Азия глазами хабаровского предпринимателя – по мемуарам А. Богданова (2)	САВЕЛЬЕВ Игорь..... 7
Еврейская община в Харбине	ТАКАО Тидзуро..... 10
Визит в Японию великого князя Георгия Михайловича в 1916 г. как пример «августейшей дипломатии»	БАРЫШЕВ Эдуард..... 13
Русский эмигрант В.А. Покровский – певчий церковного хора. Человек и музыка.	МАЦУСИМА Дзюнко..... 16
Революционный Благовещенск в альбоме Гундзи Томомаро	ФУНАКАВА Харухи..... 19
【Познакомьтесь с новинками】 — I (японский язык)	
Представление монографии Цугуо ТОГАВА «Цветы Сабита – русская история в моей судьбе»	ЯСУИ Рёхэй..... 24
Представление монографии Эдуарда БАРЫШЕВА «Эпоха японо-российского союза: 1914-1917 гг.» - международные отношения «с человеческим лицом»	НАКАМУРА Ёсикадзу..... 25
【Познакомьтесь с новинками】 — II (русский язык)	
«Русские эмигранты в Китае – по дневникам супругов Серебренниковых» (сост. А.А. Хисамутдинов)	МАЦУМУРА Мияко..... 28
Архиепископ Пермский Александр Толстопятов и Япония	СИМИДЗУ Тосиюки..... 31
Сведения о научной работе и прочих событиях в жизни членов Ассоциации 34

《研究会報告》

- 第 61 回 2007 年 12 月 1 日 於・青山学院大学渋谷キャンパス
オリガ・ズヴェーレヴァ氏 「1954 年～1957 年東京のロシア人社会の思い出—恵泉女学園通学,
ロシア人クラブでの交流, ソ連帰国まで—」
ガルキン・セルゲイ氏 「エポフ家と日本—系譜学的視座から見た日露交渉史—」
高尾千津子氏 「日本統治下ハルビンのユダヤ人社会」
- 第 62 回 2008 年 2 月 2 日 於・青山学院大学渋谷キャンパス
沢田和彦氏 「横浜の白系ロシア人」
バルィシエフ・エドワルド氏 「1916 年のゲオールギー・ミハイロヴィッチ大公の訪日を振り返る」
松島純子氏 「亡命ロシア人の聖歌者—ポクロフスキーの人と音楽」

«Доклады на заседаниях Ассоциации»

На 61-м заседании: 1 декабря 2007 г., Университет Аояма Гакуин

- ЗВЕРЕВА Ольга Воспоминания о русской колонии в Токио в 1954-57 гг. – учеба в Женском колледже Кэйсэн Дэёгакуэн, общение в «Русском клубе», отъезд в СССР
- ГАЛКИН Сергей Семья Эповых и Япония – История японо-российских отношений через опыт генеалогического исследования
- ТАКАО Тидзуко Еврейская община Харбина под властью японцев

На 62-м заседании: 2 февраля 2008 г., Университет Аояма Гакуин

- САВАДА Кадзухико Русские эмигранты в Иокогаме
- БАРЫШЕВ Эдуард Вспоминая визит в Японию великого князя Георгия Михайловича в 1916 г.
- МАЦУСИМА Дзюнко Русский эмигрант В.А. Покровский – певчий церковного хора. Человек и музыка.

パールィシェフ・エドワルド著『日露同盟の時代 1914～1917年』
福岡、花書院、2007年、394ページ

人の顔をもつ国際関係論

中村 喜和

今わが国で、ロシアは評判がいいとは言いがたい。インターネットに発表された日本政府のアンケート調査によると、ロシアに多少とも親しみを感じる日本人は16.2%だった。それに対して親しみを感じないと答えた者は77.6%にのぼった。さらに現在の日ロ関係を良好と意識する日本人は28.2%であり、良好ではないと見る者は56.8%であった、という。

しかし、日本とロシアの関係はいつもそれほど険悪だったのだろうか。確かに20世紀には、両国は2度も武器をとって戦った。シベリア抑留の経験をもつ旧日本兵が60万人もいた。とはいえ、外交関係をもちはじめてから1世紀半のあいだ、二つの国は海をへだてて絶えずにらみ合っていたわけではない。稀にはあるが、仲良く手を握った時期もあったのである。1914～1917年は第一次世界大戦の期間である。このとき、日本とロシアは歴史上はじめて同盟国になった。手を取り合って、ドイツと戦ったのだ。ここで取りあげる書物はその稀有な時代をテーマにした研究である。著者は九州大学に留学して研修を積んだロシア人であるが、日本語で書かれていることが、まずうれしい。

題名から判断して日ロ友好の時代を謳歌した本かと勘違いしてはいけない。副題に《「例外的な友好」の真相》とあることからわかるように、「日露同盟」の本質を解明しようとした、あく



までも学問的な研究である。

図書館に収まれば、本書は国際関係史の部門に分類されるかもしれない。しかし著者は一般に通用している国際関係史の方法にしたがってこの本を書いたのではない。それが本書の最大の特徴である。著者の考えにしがえば、「古典的な国際関係論は、勢力均衡と国益の概念を中心とする権力政治論の形をとり、典型的な現実主義・唯物論で特徴づけられる。そこでは国際政治のすべての現象は権力の均衡と国益の総計の上に成り立っているものとみなされる。」(p. 15) それはそれで決して誤っているとは言わないが、著者のバルィシエフ氏は日露の接近には「日本の指導者が大きな努力をしていることを忘れてはならない」(p. 16) と主張した日露関係史研究者の故保田孝一さんの発言(出典は原・外川編『講座スラブの世界 8』「スラブと日本」弘文堂、1995、の中の保田論文「明治時代の日露関係—皇室外交と満韓交換提案を中心に」)に触発され、次のような「古典的な歴史学的なスタンス」をとって、この本を執筆したのだった。「政治はあくまで社会生活の一部として位置づけられている。この長編の歴史的な《語らい》には、元老、軍人、外交官、実業家、思想家、ジャーナリスト、皇族をはじめ、数多くの《主人公》が登場し、同時代の日露接近の様子が具体的に活写されることになる。」(p. 17)

このように著者は独自の方法をとることを宣言しているわけであるが、著者は終始一貫して厳格なアカデミズムの姿勢をくずしていない。まず先行研究に網羅的に言及し、それぞれの特徴をときに批判的に、ときに共感をこめて紹介する。古くから日本人の著作には松本忠雄、沼田市郎、信夫清三郎、鹿島守之助、田中直吉、さらには小林幸男や吉村道男らによる記録や論考があった。ロシア側ではソビエト時代に何点かの著書が刊行されたし、近いところでは、われわれの研究会の仲間でもあるイーゴリ・サヴェーリエフ、ピョートル・ポダルコ、ワシーリー・モロジャコフらの研究も著者のテーマに多少ともふれている。関心をもたれたのは日本やロシアにかぎらず、米英や日本において、英語で発表された数々の著書・論文がある。すでにかかなりの調査や考究が蓄積されていることがわかる。

国際関係の研究が宿命的に負わされているように、事は日本とロシアの2カ国にかかわりながら、両者の折衝過程は当事国以外のあらゆる国々や地域の出来事と連動していた。その点で、当然ながら、本書の記述は刻々と変化してやまない世界規模でのシナリオなき壮大なドラマという観を呈している。

アジアの新興国日本にはヨーロッパ諸国の争いに便乗して、当時支那と呼ばれた中国への進出を一層強めようという野心があった。その意図は欧米諸国には見え見えで、中国自体や欧米諸外国は懸命にそれを牽制しようとする。一方、欧州の列強の一つであるロシアは、国内にはげしい「階級闘争」をかかえて久しかった。「支配階級」の中にも保守派とリベラル派の対立があった。戦争に踏み込むと、たちまち武器弾薬が決定的に不足していることが露呈した。米国をはじめ各地に組織をもつユダヤ人は反ユダヤ主義的政策をとるツァーリ専制国家を目の敵にし、豊富な資金力を背景にロシア打倒のキャンペーンをくりひろげた。この大戦では、ユダヤ人はドイツに肩入れしたのだ。ロシアは戦場以外に、目に見えない強敵をかかえていたのだ。「ジョイント」と呼ばれるユダヤ勢力の連合した活動をおびた資料に依拠しながら追究しているところが本書の見所の一つだろう。

そもそもロシアが日本に接近しようとした最大の動機は、ドイツと戦闘を継続するための小銃や大砲とその弾丸の補給であった。1914年以後の約3年間ロシアは絶えずその供給を日本に求め、日本側は相手の弱みに付けこんで少しでも有利な方向に条件を吊上げ、もろもろの約束を取り

付けようとした。虚実の駆け引きの経緯が微に入り細をうがって分析される。その綿密な記述が本書の眼目であり、書物全体の大部分を占めている。

主として日本で交渉相手となったのが外務省であることはいまでもないが、この国には政府のほかに元老という政治中枢も存在した。とりわけ元老山縣有朋にはロシアへの同情と好意があった。それでも、外務省が常に彼の意のままに動いたわけではない。日本には親英派（日英同盟重視派）と親独派（山縣などのグループ）の対立があったからである、と著者は分析している。

ロシア外交の切り札になったのは、ロマノフ王朝に連なるゲオルギー・ミハイロヴィチ大公による1915年の日本訪問であった、と著者は見る。大公は東京で未曾有の歓迎を受けた。この訪問はやや遅れて翌年の日露間第4次協約の締結として結実する。この協定締結を東京市民は提灯行列で祝った。同1916年には答礼使節として日本から閑院宮載仁親王ことひとがロシア皇帝ニコライ二世の滞在するモギリョフの大本営まで赴いた。当のニコライがあっけなく退位を余儀なくされるのは、その72日後である。皇族外交はおよそ空虚で大仰なジェスチャーに過ぎないという見方もあるが、著者はそのような見解に与しない。当時の状況の中では、確かに現在の首脳外交に比すべき値打があったに相違ないからである。

私の考えでは、本書の注目すべき特徴は政治の世界の背後にひかえる世論の動向に大きな注意を払っていることであろう。ここでは、ロシアの世論と同様に日本の世論の動きも考察の対象に含まれる。それを確かめるために、著者は当時の日本の新聞や雑誌を博搜している。

もう一つ、見落とせないことがある。およそ国際関係史論としては以上で話が尽きているのであるが、著者はとくに「日露接近の論理とその文明史的な背景」と題する第12章を本文の末尾に据えている。国際関係では国益の考察が最重要のファクターであるが、著者はそればかりでなく、「日露両国の接近を可能とした文明史的な類似性や適合性」（p. 327）を論じているのである。「国際政治には人間関係と同様に《相性》という側面があるわけである」（p. 327）と説明されれば、事態はもっとわかりやすいだろう。第一次大戦にさいしてヨーロッパで声高に唱えられるようになった「西欧の没落」と符節を合わせたかのように、（著者の言うところでは、シュペンゲラーの有名な著書の公刊に先立って、）茅原華山、稲毛詛風などが同じ角度からこの問題を論じていたという。今の日本人からは忘れられた思想家たちの論文にまで目を通した著者の努力に敬意を払いたい。著者は同時期の徳富蘇峰や後藤新平の言説にも言及している。また、日本側と対応して、ロシアの一部知識人の中にも日露の同盟を「自然なコンビネーション」とする意見があった、という。これには文明史的に見て西欧に比べてロシアと日本がともに「第二列」（すなわち後発国）に位置していることと関係があるというのが著者の意見である。著者はさらに一步をすすめて、大庭柯公や昇曙夢らの仕事や、トルストイやドストエフスキーなどの作家たちの作品が日本の知識人の愛読書になっていたことにも重要性をみとめている。

最後に、言語について一言。私は最初に本書を読んだとき、これはロシア語からの翻訳であろうと思った。しかし、「あとがき」を読むに及んで、著者の「拙い日本語の表現や言い回しを根気強くかつ懇切丁寧に訂正してくれた知人・友人」（p. 327）のいたことを知った。このような知己を得たこと自体が著者の手柄である。

この書評の冒頭で、私は現代の日本ではロシアに親しみの感情をもたぬ日本人が多いと書いた。しかし同じ統計によると、年齢別に見れば若い世代ほど「親しみを感ずる」とする者の割合は高くなっているという。パールィシェフ氏の見るところでも日本人とロシア人の「相性」は悪くないという。日露関係の将来は必ずしも悲観するには当たらないであろう。